

March 2016 No.17



【エー・シー・ドゥー】

Aomori Contemporary Art Centre

青森公立大学 国際芸術センター青森

レポート2015

特集

ACACの展示の工夫

言語と空間vol.1

鈴木ヒラク「かなたの記号」

言語と空間vol.2

蓮沼執太「作曲的」

夏のアーティスト・イン・レジデンス2015

「Passage 永遠の一日」

秋のアーティスト・イン・レジデンス2015

「航行と軌跡」

野老朝雄×青森市所蔵作品展

「個と群」

ヴィジョン・オブ・アオモリvol.13

出町隼人「種種葉葉」

AIRS企画vol.5

石川卓磨「真空をふくむ」



言語と空間 vol.1
鈴木ヒラク かなたの記号

Langue and Space vol.1
Hiraku Suzuki *Signs of Faraway*
2015.4.18—5.17

六

十×六メートルという圧倒的なサイズの《歩く言語》(二〇一五)は、移動することと見ることが溶け合う不思議な回遊空間だ。マーカーとスプレーで銀一色に描かれた曲面をその縁に添い歩いてゆくと、光になった色彩が内面へ浸透し、軽やかに振動する。対面の高い水平窓から射し込む光の運動により、歩を進めるごとに壁面は多彩な表情を見せ、その現れては消えてゆく揺らぎの中から見る者の内部に見たこともない光景が生み出されてゆく。ストロボのような強度を持ち、小刻みなリズムを伴いながら、描くことの起源や言葉の始原の軌跡を手繰り寄せる新しいパノラマだ。

あるいはその表面をゆっくり眺めながら移動してゆくと、光が行く手を遮ったり、背後から光が追いかけてくるような感覚に捕らわれる。そうした偶発的な瞬間を留めようとカメラのフラッシュを焚くと、チカチカ壁面全体が脈動し、星屑のように瞬き、新たな天体が湧出してくる。

その回廊の始まりと終わりに向き合うように対置される《circuit》(二〇一五)は、画面中央の小さな点を起点に、シルバーインクで描かれた記号の断片が何重にも渦巻きながら大きな銀河を展開してゆく宇宙の時計のようなドロ잉である。

《歩く言語》の壁の対面に並列された《casting》(二〇一〇—二〇一五)は、世界の博物館のカタログページ上の遺物のイメージの輪郭をなぞり、切り抜いてステンシルをつくり、そこに銀のスプレーを施すことで、かつてあった物質が輪郭と影だけになって取り残されるシリーズだ。元の物質の記憶や歴史を抹消されたその銀のイメージは、未知の物体のような不思議な輝きと立体感を伴い、たち現れてくる。物質の痕跡の型を取り、ネガをポジに反転させることでイメージを生成させるこのプロセスは、写真現像や金属鑄造を想起させ、時間や空間の反転さえも連想させてゆく。新しい道具で古代の遺跡を発掘していたら未来のオブジェが形を表してきた。古代の遺物が得体の知れないオーパーツとなる。

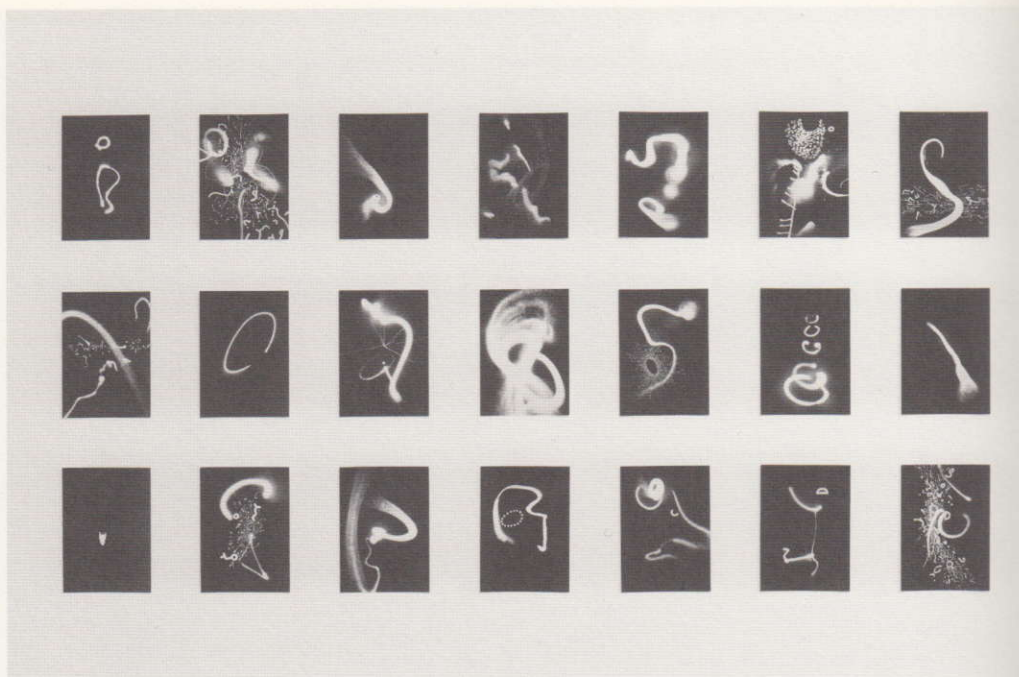
《GENZO (写真)》(二〇一四—二〇一五)は、黒い紙に銀のスプレーやマーカーで描いたドロ잉を写真撮影し、印画紙に転写した作品だが、かつて写真は銀の化合物であり、この作品は光跡を捉えた長時間露光写真や印画紙に直接物体を置いて感光させるフォトグラムといった特殊な写真技法を想起させながら、ネガティブハンド(古代の洞窟に残された手形)をドロ잉の起源と考える作者の反転の身振りへの思考を明確に写しだしている。

交通標識等に用いられる反射板を使った《鍵穴》(二〇一五)は、円や四角など大小様々な反射板を彎曲した図形の中に配置した作品で、光を向けると光源へ反射し、見る者の網膜に煌めく光の残像を焼き付ける。それらの反射板の集合

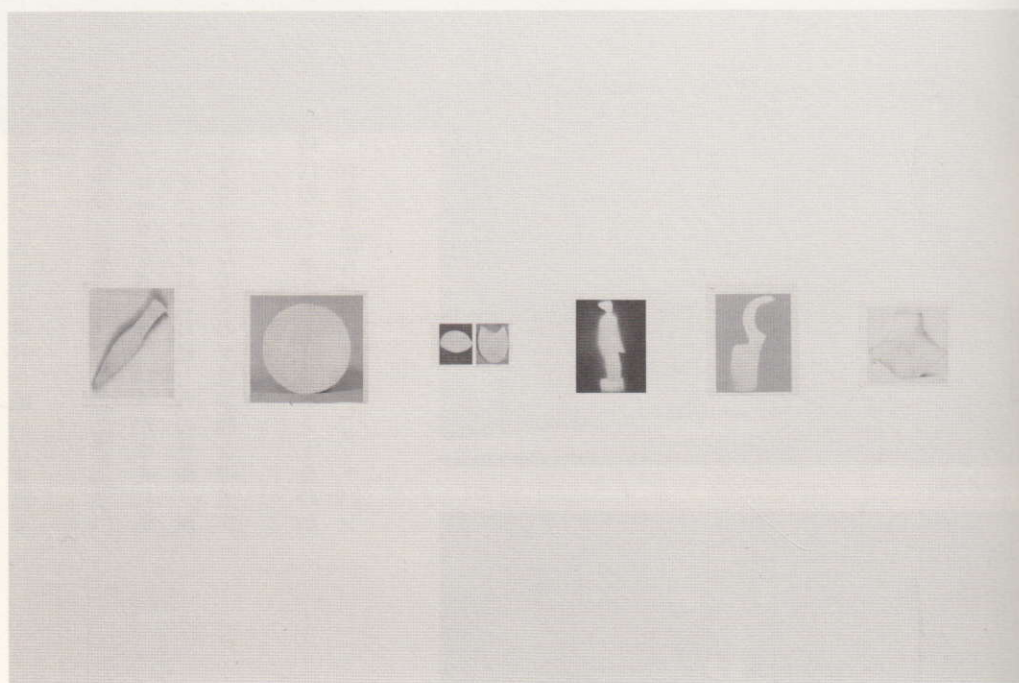
未来を身体化するドロ잉

伊藤俊治

美術史家／東京藝術大学教授



《GENZO(写真)》



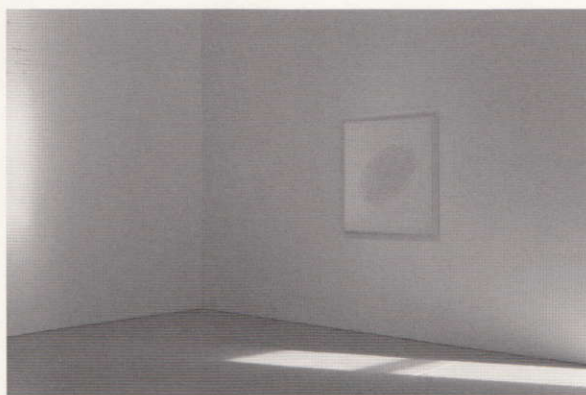
《casting》

は別世界へ通じるワームホールのような気配を湛え、見る者自身も発光する生命体となって、その鍵穴へ吸い込まれてゆくのだ。

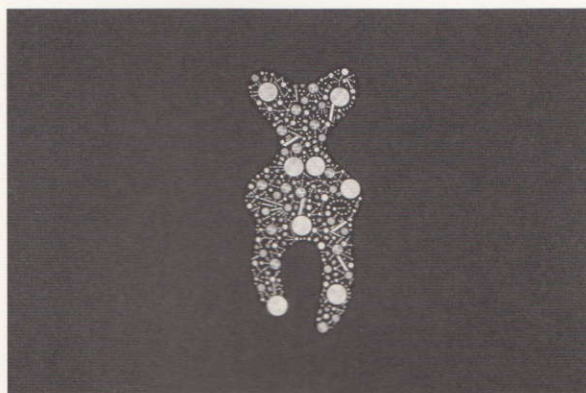
私たちは知らぬ間に多様なリアリティを掘り起こしている。視覚一つとっても、眼球は一秒間に三回見る方向を変え、複数の視点から多様な光を同時に受けとめ、情報を収集し統合している。そうしたプロセスが進行しているがゆえに私たちは広範囲に焦点の合った視覚を獲得できているのだ。それは無自覚な作業だが、そのことにより私たちの意識／無意識は、分厚い時間の織物と心のプログラミングの構造をいつも探り続けることになる。そしてその無意識的な探求作業こそが古代と未来を繋ぐ創造の秘密なのである。

鈴木ヒラクのドローイングは、ネガティブハンドがそうであったように新たな時代のノートーション・アートなのかもしれない。ノートーションは通常、ダンスなどの身体運動を表す記譜法を意味し、有名な振り付け師ルドルフ・ラバン

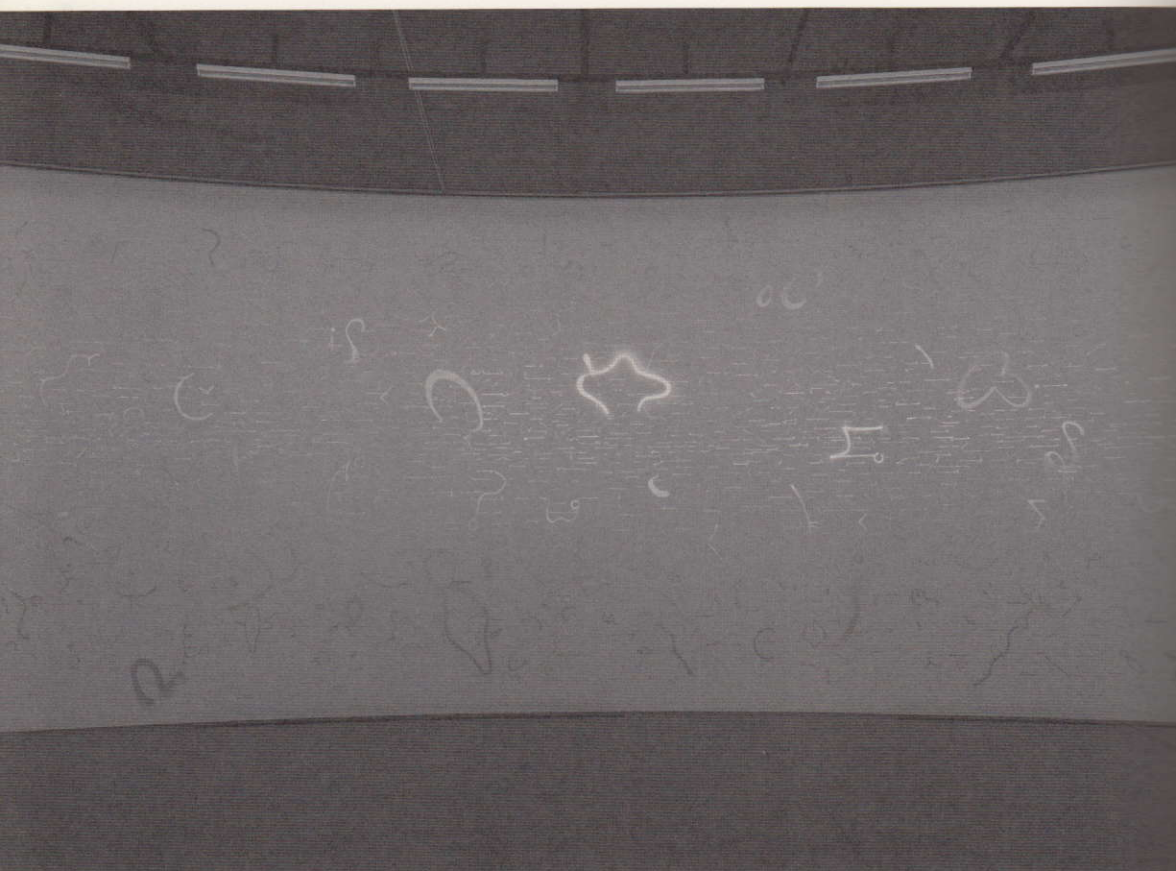
が考案したラバ・ノートーションのように、ある空間の中の身体部位や運動時間、体の向きや高さなどを示すイメージ・システムだが、グラフィックとしても興味深い構成と奥行きを持つ。NASAがこうしたノートーションを応用し、宇宙における身体の特別な動きを記録するための研究を行ったこともある。鈴木ヒラクのドローイングもまたそうした無重力のダンスのように、空間のみならず時間や次元さえも巻き込んだ身体運動の足跡なのだ。そしてドローイングは文字や図形ばかりではなく、ダイアグラムやマトリクス、光や音や映像を融合し、見えない世界をも統合する包括的なノートーションとなる。だからその場にいると作者の宇宙の中の身振りや思考をなぞることができるのだ。それはドローイングという身体行為により既存の記号や表象の体系を解体し、それらの破片を再び寄せ集め、新たな言語を生み出すという冒険でもある。身体というマルチブル・オーガンを刷新させる未来の地図、鈴木ヒラクのドローイングは、特別な場の力を得て、ようやくその全貌の片鱗を表し始めたように思う。



《circuit #06》



《鍵穴》



《歩く言語》

伊藤俊治 (いとう・としはる)

1953年生まれ、東京大学文学部美術史学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科修了(西洋美術史専攻)、多摩美術大学教授を経て、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。

美術史家、美術評論家。展覧会企画に「CHIKAKU」(クンストハウス・グラーツ)、「移動する聖地」(ICC)、「記憶/記録の漂流者たち」(東京都写真美術館)など多数。著書に「機械美術論」「電子美術論」「20世紀考古学」「20世紀写真史」「最後の画家たち」「写真都市」など多数。

Artist interview
Hiraku Suzuki



鈴木ヒラク (すずき・ひらく)

1978年生まれ。“描く”という行為を主題に、平面・インスタレーション・壁画・映像・パフォーマンス・彫刻など多岐にわたる制作を展開。時間や空間の生成と変容の方法として、ドローイングの領域を拡張し続けている。様々な音楽家とのセッションによるライブドローイング、アニメーションやコム・デ・ギャルソンとのコラボレーションも行っている。著書に「GENGA」、「鉱物探し」。 <http://hirakusuzuki.com/>

【主な個展】 2013年「Excavated Reverberations」Daiwa Foundation、ロンドン、イギリス

2011年「Glyphs of the Light」WIMBLEDON space、ロンドン、イギリス

2010年「GENGA and Recent Drawings」Galerie du Jour、パリ、フランス

【主なグループ展】 2013年「ソリエリュミエール、そして叡智」金沢21世紀美術館、石川

どのようにアーティストになったのか、現在の活動に至る経緯を教えてください。

鈴木——三歳頃から宇宙の絵を描いたり、モアイ像など世界の謎のようなものが好きで色々と紙に描いていました。

また近所の多摩丘陵に縄文土器の発掘現場が多くあり、小学校の帰り道に空き地で土器の破片を発掘したり、プラスチックのかげらや木片などを拾って集めていました。日常の風景の中に、実は別の時間と空間につながる亀裂があつて、手をつなぐことは触れることができるということ、それから自分の基本的な思考方法になっていると思います。

大学は武蔵野美術大学の映像学科に進学し、写真の構造を学んだり、クリストフ・シャルル（*1）先生のゼミでメディアアートを学びました。その一方でずっと音楽制作をしていて、実験的な音楽のシーンでライブ活動もしていました。そのうち、自分で曲を作るよりも野外で録音することに興味を持ち、雨音や都市のノイズなどのフィールドレコーディングをよくしていました。

初めてのアートプロジェクトと呼べるのは、一九九九年の大学三年次に実施したのですが、これが今の活動に続いているひとつのルーツだと思います。近所の河原を歩いていたとき、台風の影響で流れ着いた長さ三メートル重さ一トン以上ある宇宙船のようなかたちの流木に遭遇しました。日常の中の異物感というか、移動する自然という存在に何か惹かれるものを感じ、それをトラックに積んで川から運び出して、そのまま展示室にインストールしたのです。そして半年かけて流木の変化を映像と写真で記録し、元にあった河原の全く同じ場所に返しました。

これは「輪」についての作品だと思っていて、移動中に木が割れて虫が出てきたり、破片が朽ちて土になっていき、そこから植物の芽が生えたりといった自然界のサイクルと、人間が介入して流木を運び出してから河原に戻すという地上の移動の軌跡としての円環、それらの重なりを見出したのです。

ちなみに、木を戻す時に河原の清掃員がやって来て、不法投棄だと言われました。まず流木がかつてあった場所には行政側に所有権が発生するし、またそれを戻すことは河川法においては不法投棄になると。これは自然界の秩序とは別のレイヤーに存在する、人間がつくりだした秩序です。結局は交渉の結果、元の場所に戻すことができたのですが、この経験を通じて、都市と自然の境界線の曖昧さやゆらぎに興味を持ちました。例えば、その直後に制作を始めた《bacteria sign》という葉脈と土による架空の化石のような作品は、枯れ葉のカーブという自然界の線を、自身の手でつなぎ合わせることで円を描くのですが、中国の棚田の地形のように、人間と自然の秩序とのせめぎ合いの中からかたちを発掘するという方法を試みました。

大学卒業後は、しばらくはバイトをしながらバックパッカーとしてヨーロッパをぶらぶらしていました。その旅の中

*1 Christophe CHARLES (一九六四年—)
フランス生まれ。メディアアートの領域でイン
スタレーションやパフォーマンスを行う。主な作
品に CD (undirected) シリーズ (Mille
Plateaux, Subrosa, CCR, ICC, Code
Cirque, Cross, X-tract 等のレーベルを
リリース)、東京成田国際空港第3ターミナル中
央アトリウム常設サウンド・インスタレーション
(二〇〇一年) 他。

で、靴の裏についた土や埃で様々な都市のマンホールの凹凸の記号を紙上にフロッターージュして集めていました。デビッド・デイヒリー(※2)というキュレーターがこの活動に注目してくれ、二〇〇二年にTOKYO ART JUNGLE(※3)という企画に参加させてもらい、山手線の中刷り広告に東京のマンホールのフロッターージュが貼り出されました。

二〇〇五年くらいになると、自分の幅広い活動を継続して生きていくためには、ことが必要だと強く感じるようになりました。二〇〇六年から東京藝術大学大学院先端芸術表現科の伊藤俊治(※4)先生のゼミに入って、人類学や記号論を中心に学問的にも探求する機会を得ました。それまで感覚的に触手を広げてバラバラに拾っていた領域を、ことはを介して、星座を作るように接続していく過程で、自分の活動に通底する「ドロ잉」について意識し始めました。

もうひとつ重要なのは、ファッションデザイナーであり、キュレー

ターであり、精力的にアートのサポートをしているアニエス・ペー(※5)との出会いです。東京で初めて会った時、ドロ잉ングを見せた瞬間に「子供のころから絵や文字を書くのが好きだったでしょう？」と訊かれ、「はい」と答えると、「あなたは私の友達だ」と言いました。そしてその場で、数日後に実施されるファッションショーでライブドロ잉ングしてほしいと依頼され、急展開でしたが実現しました。その後もバリのギャラリーで継続的に展示をさせてもらったり、さまざまなコラボレーションを行いながら、既に十年来の付き合いになります。僕の作品は変化しているけれど、彼女はいつも直感的に理解し、支援してくれています。彼女と会って、自分の作品のことを自分よりも理解してくれる人がある、ということを知りました。

今回の滞在制作では、どんなことを考えてどのあたりに焦点を当てて作品を創作したのでしょうか？

鈴木 A C A C の建築空間をはじめて体感したとき、自分の中に風が通り抜けるような感覚を覚え、「壁画を描き



たい」という衝動に駆られました。自然光の当たる長手の壁面全体にシルバーで描くと、ギャラリーAは光の粒子が飛び交うようなひとつの明るい回廊になることがイメージできたので、奥の小部屋やギャラリーBは洞窟のような暗い空間にして、鑑賞者の移動に伴って空間自体がネガポジ反転するように展開しました。ひとつの空間の中でも、例えばシルバーの特徴として、白地に黒い線と見えていたものが、少し動くとき度は線のほうが白く見えてくるように壁面自体が光の現象を生みます。《GENZO》も《GENGA》もメディアを変換することでネガポジ反転させています。

空間だけでなく、時間の反転ということも意識しました。例えば《circuit》は記号が渦を巻いて回路の断面を形成しているような作品ですが、ギャラリーAの回廊の両端に、時計回りと反時計回りで対称となるように二点設置されており、時間の反転を象徴しています。また《casting》では、過去の遺物が未知の物体として立ち現れます。実際に身体的には時間を遡ることはできないけれど、作品の時間や人間の記憶の中ではそれは可能だということです。

僕は自分の描くかたちを、絵というより、シグナルのようなものだと思っています。例えばメールも、アドレスが一文字間違っていると届かないけれど、正しいアドレスで回路がつながると瞬時に往來しますよね。そういった、空間や時間の回路を行ったり来たりするデジタル信号のような存在としてドロージングを捉えることもできると思います。

今後の展望について教えてください。

鈴木——今回の壁画「歩く言語」を制作することで再確認したのですが、僕にとつては描くこと自体が、時間や空間についての研究だし、それは終わりのないことです。ドロージングは行為であると同時に思考であり、世界の見方を拡張させるということを、自分の作品や活動を通して提示していきたいと思っています。

特に日本は漢字文化圏の中にあり、書や象形文字の文化や、都市と自然の複雑な混在を背景とした、線に対する独自の感受性が存在する場所だと思います。いわゆるアートの一ジャンル、例えばルネッサンス以降のペインティングの下絵やスケッチ、または感情表現や落書きといった概念を超えて、僕たちは世界のあらゆる線的な事象に「ドロージング」を見出すことができます。またドロージングは世界を組み替えて、遠く離れていた領域に新しい回路をつくることができる。こうしたドロージングの普遍的な性質や現代的な可能性について考えていく開かれた場として、「ドロージングセンター」のような場を構想しています。

(二〇一五年五月二日、A C A Cにて、聞き手・構成・服部浩之、編集・金子由紀子)

*2 David O'HEILY 映像作家、キュレーター、ジャーナリスト、翻訳家、同時通訳家。
九〇年代前半より日本を拠点に世界各地で活動する。一九九五年に展覧会やイベントの企画・運営やコンサルティング等を手掛ける2X Co., Ltd.を設立。
*3 東京国際フォーラム、二〇〇二年八月一日—五日、JR山手線の車両の中吊り部分広告や床面、外壁等を使った展示「トキョーアートジャングル」は同年八月一日—五日に運行。
*4 ニ七七頁参照。
*5 Art of B (一九四一) フランス生まれ。一九七五年にファッションブランド、アニエス・ベーを立ち上げ、世界各国に店舗を構える。芸術愛好家として知られ、美術作品の収集、芸術家や作品への支援、ギャラリーの運営なども行っている。



言語と空間 vol.1
鈴木ヒラク かなたの記号

展覧会 | 2015年4月18日(土)―5月17日(日)

主催 | 青森公立大学国際芸術センター青森

協力 | AIRS、青森公立大学芸術サークル

関連イベント

■鈴木ヒラクライブドローイング&トーク | 5月3日(日)

■暗号ツアー | 4月26日(日)

■ギャラリーツアー | 5月9日(土)



Photo/小山田邦哉